横浜美術大学 正門改修デザイン

地域との結節点・大学の顔・サインシステム拠点のありかたの提案

The Main Gate Design Reconstruction of Yokohama University of Art and Design (YUAD)

Proposal concerning the design's effect on environment, utility function and YUAD brand expression

上綱久美子 [1)]　田﨑冬樹 [2)]　山下航 [2)]

Kumiko Kamitsuna [1)]　Fuyuki Tazaki [2)]　Wataru Yamashita [2)]

１）design office kk　２）横浜美術大学

Abstract：

Following a relocation of the bus stop, Yokohama University of Art and Design reassigned its former south gate to function as its new main gate. The reconstruction project conceived an entirely new campus sign system to interface with the local community and incentivized the next phase of designing the university's brand expression. In-campus survey conducted after the project completion was positive.

Key Word： Sign design system, Street furniture, Public design

1. はじめに

横浜美術大学（横浜市青葉区鴨志田町）には正門、南門、北門の３つの校門がある。2024 年度からの路線バス停留所の変更に伴い南門を正門に代えるための計画・設計を行なった。

2019 年に本学キャンパスサイン（屋外サイン）整備［注１］が完了しており、正門の位置が変わることに伴う動線の変容によるキャンパスサインシステムやサイン拠点機能の見直しを検証する上で、新しい正門デザインのあり方は重要であった。また、本学のブランディングデザインのあり方にも大きく関わり、ひいては地域と本学の関係性を示唆する結節点として、環境デザインの視点から本学の将来性と地域との関わりを標榜するヒト・モノ・バ・コトのあるべき姿を示す姿勢で取り組んだ。

2. 経緯

本学は、東急田園都市線青葉台駅から路線バスを利用するアクセスがメインである。従来は、「横浜美術大学」バス停直近の本学正門から入構が主であったが、2022 年、東急バスは運転手不足による運行本数の削減、乗降者数の多い時間帯の輸送能力を高めた連節バスの運行等により、「横浜美術大学」バス停を利用しないことを本学に伝えた。それを受けて、一つ青葉台駅寄りの「すみよし台」（2024 年春から横浜美術大学（すみよし台）バス停）の利用が主流となるため、直近の南門を本学出入構のメインとして、正門として改修することになった。南門前にはコンビニエンスストアがあり、従来より学内関係者の利用があったが、正門となることで登下校時の利用が加わり、人流の往来が急増する。

また、2019 年に整備完了した屋外キャンパスサインは、当時の動線計画による案内誘導サインと各建物入口の施設記名サインシステムであり、南門にも案内サインが設置してある。

3. 設計条件の整理

南門を正門に改修する際に、まず本学敷地および周辺の都市計画上の上位関連計画の把握と整理を行なった。

3-1. 横浜市都市計画に基づく申請許可

本学敷地は、横浜市都市計画において市街化調整区域および風致地区に指定されている。敷地内の建築物の建替え等、景観に関わる工作物や造成等について申請・許可が必要であった。市街化調整区域における開発条件に鑑み、本設計では切土盛土は±０の範囲で行うとして、現状のグランドラインを基準としたデザインを行うこととした。風致地区の景観基準については、工作物設置の規模・素材・色彩・照明等の資料提出が必要である。

また本学では、昭和 58 年に横浜市と緑地協定を締結しており、敷地内の植栽管理計画を策定の上、維持管理の継続が求められている。具体的には、高さ 5m 以上の高木の本数を変えないことが主な条件であり、そのための申請・許可の手続きが必要であった。

3-2. 都市計画道路の進捗

本学前面の道路の一部は、横浜市都市計画道路（恩田元石川線）である。事業が着手されれば、将来的に道路幅員の拡幅と同時に現行の道路線形が変わる［注２］。南門（新正門）の道路部分は都市計画道路対象から外れるため、現行の横浜美術大学（すみよし台）バス停は移動するか無くなることが予想される。

本学に関わる範囲の進捗については、未着手であるため整備完了までは数十年単位となる見通しだが、喫緊案件が浮上の場合は着手・着工が早まる可能性がある。

3-3. 横浜市「水と緑の計画」

横浜市「水と緑の計画」において、本学敷地を含むこどもの国周辺一帯は、「緑の拠点」と位置付けられ、横浜市の都市計画において緑を中心とした重点的な場所になっている［注３］。

3-4. 大学の運営等について

(1) 守衛機能

以前、旧南門に守衛ボックスがあったが、常駐要員は配置せず監視カメラ設置のみで守衛機能を果たしているとは言い難い状況であった。守衛機能の見直しには、コスト面、管理面等の検証が必要であるため、本設計では守衛ボックス撤去、監視カメラの新設置と来校者に対する案内情報、無断入構に対する注意規制等の情報伝達に留めるとした。今後守衛機能のあり方については改めて検討する方針である。

(2) 車両乗り入れ

旧南門前の歩道は切り下げられ、車道から車両の乗り入れ可能であった。本設計では事故防止等の観点から、緊急車両やバイクも含めて全ての車両は北門からの入構のみとし、新正門へ車両・バイクの入構禁止を提案した。それをうけ、歩道の切り上げ工事を行うため横浜市青葉土木事務所へ申請した。

(3) 交通安全（横断歩道）

新正門は、地域幹線道路交差点直近に位置する。バス停下車後、本学に行くにはこの交差点を渡る必要があるがその際、問題が二つある。一つめの問題は、交差点を二度横断する必要があることだ。二つめは、新正門とコンビニエンスストア側歩道を結ぶ横断歩道帯形状が正門へ向かう歩行者動線にそぐわず、斜め横断が

© Copyright - JSSD72th

写真 1 正門正面を見る

写真 2 夜の大学名称サイン

写真 3 ポスターケースとツリーサークルベンチ

写真 4 ツリーサークルベンチとポスターケース夜景

多いことである。これは、正門前の歩道幅員の狭さが少なからず起因しているとも考えらえる。

4. デザインの考え方・コンセプトなど

前項の条件・問題を前提に、デザインの方向性を ①利便性を高めた校門の機能整理をする ②安全で出入りしやすく、人が溜まる心地よい場所を創出する ③本学のアイデンティティの表現かつ品位のある顔づくりをする ④大学行事の案内・アピールをする ⑤初めての来校者でもわかりやすく入りやすくする ⑥緑豊かな環境と景観を維持する ⑦将来的なタイムラインに適応できる余地を備える、と整理した。

以上を踏まえて、『緑の保全と地域環境への貢献』、『美術・アート・デザインの営みを伝える（美大らしさを伝える）』、『開かれた明るい玄関口・交流拠点』の３つの柱をコンセプトに、正門の安全性と防犯性を確保したデザインに取り組んだ。

5. デザインの対象とプロセス概要

5-1.ベースデザイン

コンセプトに基づいたデザイン検討と議論を重ね、ベースデザインを定めた。ポイントは次の通りである。(1)人が溜まれる空間を創出しつつ防犯性を確保した門扉と境界フェンスの配置 (2)人を迎え入れる場にふさわしい空間を構成し、既存高木とふれあえる場の形成 (3)既存高木周りにベンチを配置して、人と既存高木との関係性を休憩機能に転化 (4)効果的で美大らしいポスターの見せ方と配置 (5)人を迎え入れることをアフォードするストリートファニチャーデザインと空間づくり (6)昼間だけでなく夜間の見せ方もデザインする。

抜本的な造成をせずに、既存高木を温存して現状グランドラインを維持した上での設計は容易ではないが、本件では方針と現状条件がうまく繋がった。上位関連計画の軌道上で、地域が目指す環境創出のあり方と同じ目線でデザインができたと省察する。

5-2.ストリートファニチャーデザイン

正門の場を構成するストリートファニチャー（SF）は、大学名称サイン、門扉と境界フェンス、ポスターケース、ツリーサークルベンチ、その他サイン類等である。昼景はもちろんのこと夜景も照明との関係において、安全性・視認性・演出性など調和のとれたデザインとした。主な３つの SF デザインは以下の通り。

(1)大学名称サインは、バス停からの視認性と周辺景観との関係性において、設置場所、文字の大きさ、イベント時の情報掲出機能の付加、夜間の顕示性などの課題に対して最適解を示す。

(2)門扉と境界フェンスは、防犯と安全の条件は満たしつつ、大学敷地内外の景観の連続性を表現できる威圧感の少ないデザインを追究した。明るく親しみやすい結節点（境界）の実現は、防犯性・安全性にも大きな効果をもたらすと考える。

(3)ポスターケース３基は、学内外の展覧会のポスター等の掲出機能だけでなく、正門の空間区分やシークエンスに対応させた形状と配置の議論・検討に多くの時間をかけた。重要な景観構成要素として、景観を阻害しない存在感で掲出ポスターの情報内容を最大限アピールできかつ情報を活かす SF デザインが達成した。

5-3.照明デザイン

昼間とは違った表情を見せ、大学としての品格と場所性を顕示する夜間景観を創出するため、(1)内照式大学名称の表示で視認性と顕在性を高める (2)既存高木ツリーサークルベンチ座面下の間接照明で、腰掛けをアフォードする (3)構内通路沿い(西側)に足元照明を設置して動線を顕示化し、安全性を高める (4)境界フェンス沿いに埋込照明を設置して、境界ラインを顕在化し、防犯性を高める (5)正門全体を適度に照らして、安全安心を確保する、の考え方に基づいて配置と灯器具選定をした。

6. 整備後のアンケート調査・分析・考察

新しい正門は、2024 年 9 月の大学後期授業開始と同時の供用となった。いくつかの課題を積み残しての新しい正門スタートとなったが、2025 年 1 月にユーザーである在校生・教職員らに正門整備後のアンケート調査を行った(回答数 227 名)。その結果、ほとんどの回答者が新しい正門に好印象・高評価を示す一方、正門前の横断歩道マナーや交差点横断方法等に不満と改善を求める声が多数見受けられた。また、大学敷地内外の境界の可視化の軽減で、境界フェンス内の景観改善・向上を求める声も多かった。

交通安全面および人が快適に行動できる環境づくりおよび設えと視覚的な快適性を高めることで大学のブランディングデザインにつなげる必然性が求められたことを受けて、次のフェーズにつなげて行く準備の必要性を痛感する。

7. おわりに

本件は、本学キャンパスサインデザインの共同研究の一環で、2011 年、広くはないが複雑な本学の空間構造における案内誘導サインシステム開発の必要性が出発点であった。以降、時代に伴う諸条件等の再確認・再検証を経て、2018,2019 年キャンパス屋外サイン計画・設計を行い整備完了した。そして、コロナ禍を経て屋外サイン表示の見直し等を進める中、本件のデザイン解決を実現し、利用者から高評価を得られたことは幸甚である。

人に対して行動を助けて、空間ストーリーの語り部となるサインは表示（視覚情報）だけでなく、空間性や空間と空間をつなぐ境界や結節点も重要な関係要素であり、サインクオリティを大きく左右する。特に大半のユーザーの行動起点となる正門は、キャンパスサインシステムの拠点であり、正門そのものがサインでありブランディングを示唆するものと考えている。

注釈

1) 上綱久美子,山田弘和,他：横浜美術大学のキャンパスサインデザイン,デザイン学研究 ,26(1),84-89,2020
2) 恩田元石川線(鉄地区),https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/doro/kensetsu/douro/rosen/onmotokurogane.html（参照日 2024 年 11 月 1 日）
3) 横浜市 水と緑の基本計画 ,https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/midori-koen/mizutomidori.files/0045_20190521.pdf（参照日 2020 年 5 月 18 日）

© Copyright - JSSD72th